

令和4年9月14日

南の風特集プラスI 恩塚HCの目指すものII

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

前号の続きです。恩塚HCのコメントです。

「常識あるバスケット人が場面に応じて最適解を選択し、最適解はみんな常識として理解しているので、他の選手もシンクロしていくっていう、規律と即興と躍動感につながっていくことを強みにしていきたいと思っています」

選手にとっては、ホーバスHCのときのような覚える大変さがなくなる代わりに、自分で判断する大変さが出てくる。大変な面もあるが、自分で判断することができるようになれば自信もついてくる。

さらに続けて恩塚HCは、

「自分で決められるっていうのは、僕、自己肯定感の一番の根源だと思っているんですよ。自分の考えでプレーを選択できる。人生も同じじゃないですか。私で私の人生を選択できる。同じように自分でプレーを選択できるんだということで、セルフイメージも高まって、パフォーマンスも上げていくっていう裏のねらいもあります」

女子日本代表選手の中には、シーズン中(WJBAリーグ)に所属しているチームと全く違う恩塚流コーチングに戸惑いを見せる選手もいたという。

「選手たちは、はじめ違和感があった感じでしたね。『もっと怒ってください』みたいな感じのことを言われたこともあります」と恩塚HCは苦笑する。

そうやってきた選手には、「怒るのは悪意を持ってよくないことをしたときだと思う。志を持ってやり方もちゃんと理解して、自分自身を持つとうとしてやっているんだったら怒る必要ないよね」と説明したという。またそれをきっかけに「怒らないと頑張らない」というアプローチについても、改めて考えて見てほしいという話もしたという。

「怒らないと頑張らないって、相手を馬鹿にしていますか?『話せばわかるし、絶対伝わる。相手を信頼しよう。怒らないとわからないというのは相手を信頼していないからじゃないのか?』という話をしました」

そういう話をしたあとに、チーム内の人間関係に変化があったという。

「先輩から後輩に向けての責め心を持った指摘がなくなったっていうのは聞きました。それは信頼があるからですね。そういう関係でお互いを信頼し合ってやっていこうぜ、って言えるエネルギーの方が大きいんじゃないかなって考えています」

選手一人ひとりに、どんな自分になりたいかを聞き、チームをまとめる。お互いを信頼し合う。そういった人間関係を築くのは時間がかかることだ。活動期間が限られる代表チームでそれやるのはたいへんではないだろうか。そのことについて恩塚HCは、

「例えばアジアカップ(2021秋)のときは、一ヶ月ないくらいの期間でしたができましたし、この人はこんなふうになりたいと思っているのを知っていると、人との付き合いになるので、感情移入もできるじゃないですか。そういう意味では、全体像を持って進んでいくっていう効率と、あとは人と人とのつながりっていう意味の絆を感じながら得られる相乗効果みたいな部分もある」という。次号へ。